
リリカルなのは H E R O S 外伝

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはHEROS外伝

【NZコード】

N3545X

【作者名】

ゼロデイアス

【あらすじ】

これは「魔法少女リリカルなのはHEROS」の光がない間の空白期の話。

「魔法少女リリカルなのはHEROS」を見ないと分からぬ内容がありますのでご注意ください。

最初に（前書き）

やつぱり新連載で行く事にします。

最初に

「ラン
「はい、始まりましたあ、『リリカルなのはHEROES』の番外編
ストーリー！」

なのは

「今日は解説などを行い、やつて行こうと思いまーす！」

フェイト

「……」どんよりオーラ。

カズキ

「フェイト、光がいなくて寂しい気持ちは分かるが明るく行こうよ
？」

はやて

「すずかちゃんとアリサちゃんだけ大翔さんとキョウスケさんい
ないの我慢して……」

キョウスケ・大翔

「「んっ？」」

はやて

「なんであるん！？」

アリサ

「光以外のメインキャラは全員レギュラー、準レギュラーだからね

フェイト

「なんで光だけ！？（泣」

ダイキ

「しょうがないじゃないか。光が9つの世界行ってる間の話僕等に出番無いんだから」

なのは

「ラン、解説お願い」

ラン

「お、おひ。まあこの作品は分かりやすく言えば『リリカルなのはHERO』の番外編を中心とした話で、1話1話主役が違う」

キョウスケ

「ただし、破壊者に出番は無い」

大翔

「フェイトにとつては残念ながら」

フェイト

「○○」

ラン

「第1弾の番外編はこれだあ！…」

列伝の次回はこれだあ！的な。

黒いゼロが出現？

どちが強いかという挑戦を受けるウルトラマンゼロ」とラン…

だが彼には勝つ自信が無かつた……。

第1弾『死闘！ ゼロ∨Sダークゼロ！』

第1弾『死闘！ゼロVSダークゼロ』（前書き）

「魔法少女まどか マギカ NEXUS」も更新しましたのでそちらもよろしくお願ひします。

OP 「すすめ！ ウルトラマンゼロ」
挿入歌 「DREAM FIGHTER」
ED 「キラメク未来」

暗黒巨人ダークゼロ
破壊獣モンスター ガー
登場。

第1弾『死闘！ゼロバードークゼロ』

「ランとなのは、フュイト、はやてはいつもより学校に行き、龍夜、セイナ、ライハ、ネーナ、カズキも入学する事になった。

アホの子は一応ちゃんと入学出来た。

はやてやカズキ、セイナ達はクラスが違い、龍夜は年が違うので上のクラスに入る事になり、授業を受けていた。

「ねーねー、なんで龍夜と同じクラスじゃないの？」

「あのですね、龍夜さんどう見ても私達と年が違うじゃないですか。少しでも年が離れてればこうなりますよ」

セイナのその答えにライハ「ふう~」っと頬を膨らませていた。

因みにマテリアルズの事はなのは達の親戚だったり双子の妹だったりという事にしている。

そしてクラスはセイナ達がなのは達のいるクラス、カズキがはやてと同じクラス、龍夜は上の学年という事である。

その頃、なのは達の教室では……。

「……」

フェイトに元気が無かつた。

「ねえ、やっぱり光がいなくなつたからフュイト元気無いの？」

アリサが小声でランに尋ねると、ランは「あ」と答えた。

光は現在9つの世界ウルトラマンと仮面ライダーの世界を旅している途中である、光とフロイトは恋仲な為、フロイトは寂しがっていたのだ。

(光、早く帰つてきてよ……)

光は学校では別の学校に転校した事になつていて、この世界に戻つてくればまたこの学校へ入学する。

*

放課後、ランとのはは手を繋ぎながら帰宅をしていく途中で、今2人は人気のない橋を渡つて歩いていた。

「やつぱりフロイトちゃん、寂しいんだうね。もし、ランが遠い所行つたら……」

なのははチラッとランを見る。

「大丈夫だよ、光だつて言つてたる? あいつは絶対帰つてくれるつ

て

「……うん

赤い身体に頭部に皿がある「破壊獣モンスター・ガード」が突如空中からワームホールが出現し、降り立つた。

「ギャオオオオオオオオ！」

「怪獣だよラン！」

「ああ！」

ランはウルトラゼロアイを取り出すが、その時、視線を感じ振り返ると少し離れた位置に自分達と少し年上くらいの少年がこちらを見ていた。

「なに？ あの人？」

少年はウルトラゼロアイそっくりの黒いウルトラゼロアイ「ダークゼロアイ」を取り出し、目に装着した。

「デュワッ！-！」

少年の姿は黒い光に包まれ、モンスター・ガードの元まで飛んで行き、モンスター・ガードの目の前にウルトラマンゼロそっくりの巨人が現れた。

プロテクターと曰は紅く、身体の銀色の部分以外は黒く染まつたゼロ、「暗黒巨人ダークゼロ」へと少年は変身したのだ。

「あれって……！」

「ウルトラマン、ゼロ！？」

人々はダークゼロをウルトラマンゼロと勘違いし、喜ぶ者がいるが

すぐにつもと違つと氣付いた。

「シェア！！」

ダークゼロはモンスターーガーの顔を蹴りつける。

「グウ！？」

負けじとモンスターーガーが連続でダークゼロに殴りかかるがダークゼロは余裕で全てを避け、モンスターーガーの背後に回り込んで首を絞めつけ、地へと叩きつける。

「デュッ！！」

「ガオオ！？」

「ヌオオ！？」
「ハアア、シェア！！」

叩きつけたモンスターーガーの頭を掴み、持ち上げてモンスターーガーの横腹を蹴り、腹部に膝蹴りを炸裂させた。

右足に炎をまとわせて繰り出す飛び蹴り、「ダークゼロキック」がモンスターーガーの弱点の頭の皿に炸裂し、皿が割れ、モンスターーガーは力なく倒れこんで消滅した。

ダークゼロは人々に向けてサムズアップをしたことでの人々は彼もウルトラマンだと思い安心感を抱いた。

そして人々から歓声が上がり、ダークゼロは両手を広げて歓声を受け止める。

「ハツハツハツハ

*

翠屋へと戻ったランとなののは……。

「くつそ!! なんなんだあいつは! 人の姿真似しやがつて!
「真似つて姿だけだよ……?」

「ちょいぐら俺出かけてくる!! ……あの一セモノ野郎見つくれって
やる!!」

ランは翠屋を飛びだし、先程の少年を探しに行つた。

「ちよつとラン!!?」

ランは川沿い辺りまで走りながら少年を探していく。

「誰かお探しかい?」

ランが振り返るとそこにはあの少年がいた。

「この一セモノ野郎……」

「一セモノ? バカ言つな。俺もウルトラマンゼロだ
「ふざけんな! あんなんどう見ても一セモノだろ?」

少年は「ふう～」とため息をつくと……。

「残念だが、一セモノじゃない。最も『元』ウルトラマンだが」

「なに？」

「俺は別世界に渡る術がある。つまり、俺は別世界から現れた」

少年の話だと、ランがいた世界とは違う世界のウルトラマンゼロで、ランと同じくウルトラマンレオの元で禁句を犯したため修行していた。

だが彼は修行が嫌で修行から逃げ、ある星で「闇」を自分のものにした。

それがあの姿、ダークゼロである。

「んで、俺は力をもつと求め、ダークゼロになつた際に別世界に行ける能力を見に付け色々な世界を周りながら強い奴を倒し強くなり続けた」

「で、次のターゲットがこの世界つて訳か

少年は「やうだ」と答え、ランを指差す。

「ホントは破壊者とかいう奴と戦いたかったが不在みたいだからその師匠と言われてるゼロ、お前に決闘を申し込む！！」

そういうと同時に少年はランに向かって一瞬で近づき、ランの胸倉を掴んで放り投げる。

「ツー？」

地面に呑みつけられるラン。

「ぐあつ！？　いつて～！？」

「もし断つたら、怪獣を送り続けて挑発を繰り返す。決闘は今日の夕方5時だ」

少年はそれだけ言つと去つていつた。

「やうだ、俺の名前を教えてやる。『諸星レイヤ』もろほしだ」

名乗つた後、レイヤは歩き去つた。

（あいつ、俺より強い。今の俺じや……）

ランはその場に座り込む。

「ラン！」

とそこへなのはが駆けつけた。

「なのは……」

「どうしたの？　元気無そいつな顔だけビ……？」

なのはがランの隣に座つくる。

ランは先程の事をなのはに話してみた。

「そんな事で落ち込んでたの？」

「そんな事つて……、もし、俺が負けたらつて思つたら……」

なのはが突然ランの両肩を掴み、顔を近づける。

「はつー!? ちよ、なのはー!/?／＼／＼／＼

「えいー!」

顔を真っ赤にしてるランだが突如なのはがランに「俺は石だ、石頭だあー!」とか言つてる人波の威力の頭突きを炸裂させた。

「アダアー!?」

「ランらしくないよそんなのー。ランはいつも自信満々で、そんなちゃんと戦う前から諦めてビリするのー? ランはランらしく、何時も通りに戦えればいいんだよ、ランらしくー。」

なのはのその励ましに、ランは笑みを溢し、なのはを抱きしめる。

「ふえつー／＼／＼

「ありがとな、なのは

「う、うんー／＼／＼

もうすぐ約束の時間、ランは走り出す。

そして時刻が丁度5時になると、ランとレイヤは人気のないある場所で再び顔を合わせ、ランはウルトラゼロアイ、レイヤはダークゼロアイを取り出して目に装着した。

「「トコワッー!」

ランはウルトラマンゼロ、レイヤはダークゼロに変身した。

「「やあ、おっぱじあみつけー!」

「「やあ、おっぱじあみつけー!」

ゼロとダークゼロの死闘が始まる。

「デアツ！」

「デュア！！」

ゼロとダークゼロの蹴りが同時に炸裂するが、威力はダークゼロの方が上であり、足にダメージを負うゼロ。

「デユツ！？」

「デアツ！！」

ダークゼロがゼロの肩を掴み、膝蹴りをゼロの胸に叩きこんでゼロの顎にアッパーを決める。

「デアツ！！」

「グアツ！－？」

ダークゼロの攻撃に倒れこむゼロ。

「どうした？ この程度か！－！」

ゼロを無理やり立たせ、ダークゼロは何度もゼロの顔を殴りつける。

「ぐつ！？ がはつ！？」

民間人などはなぜゼロとダークゼロが戦つてゐるのか不明であり、困惑していた。

倒れこんだゼロを両手を広げ、「ハハハハ」と笑いながらゼロを蹴

りあげるダークゼロ。

「ングツ！？」

ゼロの頭を掴み、ゼロの腹部を殴りつける。

「野郎！… シェア！…」

ゼロはジャンプしてダークゼロに飛び蹴りを繰り出したがダークゼロはゼロの足を掴んで投げ飛ばす。

「ぬわあ！…？」

次にゼロはダークゼロに殴りかかるもダークゼロは避けてゼロの背中を蹴りつけ、ゼロとダークゼロは互いに同時に両腕をL字に組んでゼロは必殺光線「ワイドゼロショット」、ダークゼロも必殺光線「ダークゼロショット」を同時に発射。

威力を高めるゼロだが、ダークゼロの方が威力は上でゼロは吹き飛ばされる。

「デコワツ！…？」

押されっぱなしのゼロ、なのはは橋の上で戦いの様子を見ている人々に呼びかけた。

「皆さん、あっちのゼロを応援しましょうよ！… あの黒いゼロの戦い方は、自分の強さをただ自慢してるだけの戦いです！」

なのはのその呼びかけに、確かにそうだと思い始める人々。

「ウルトラマンゼロは、そんな面倒するような戦いは絶対にしない！！ ゼロ、頑張って！！」

なのはの声援を受けるゼロ、さらに次々と人々の声援がゼロに送られる。

「頑張れウルトラマーン！！
「ゼロー！！」

それが目障りなのか、ダークゼロは人々を睨むように見る。

ダークゼロはゼロを抑えつけて何度もその顔を殴るが、途中ゼロに拳を受け止められる。

「へっ、やるじゃねえか……」
「なに！？」
「だがな、自分の強さを自慢するような野郎が俺に挑もうなど……
： 2万年早いぜえ！！」

ダークゼロを突き離し、廻し蹴りを叩きこむゼロ。

「ぐつ！？ デュア！？」

ダークゼロは頭にある2本のブームラン「ダークゼロスラッガー」をゼロに投げ、対するゼロは頭の上有る2本のブームラン「ゼロスラッガー」をダークゼロスラッガーを弾く為に投げ、互いのスラッガーが激しくぶつかり合い頭の上に戻ってくる。

「デヤア！！」

ゼロに殴りかかるダークゼロだが、ゼロは避け、ダークゼロの背中に足を振り上げてそのままダークゼロの背中に思いっきり足を振り下げて蹴りつけ、倒れこんだダークゼロを両腕で逆さに持ち、高く飛び上がってパイルドライバーの様な動作でダークゼロを頭から地面に叩きつける「ゼロドライバー」を炸裂させる。

「でりゃあああ！！！」

「ぐわあああ！！！？」

「うわっ、いたそ～」

なのはは頭を押されてそんな事を呟く。

「ぐっ……！んの野郎、よくもやりやがったなあー！」

頭からダークゼロスラッガーを手にとり、ゼロに突っ込んで行く。

対するゼロは頭のゼロスラッガーを手にとり、融合せんせん型の剣「ゼロツインソード」へと変える。

「フン、ショア！！」

ゼロは一ちらへ接近するダークゼロに向かってゼロツインソードを構えてこちらも突撃、そして腕を伸ばし、高速でドリルのように回転しながらゼロツインソードで敵を斬りつける「プラズマスパークスピン」を繰り出す。

「ブラックホールが、吹き荒れるぜえー！」

ダークゼロとぶつかり合つと、ダークゼロは吹き飛び、遠くへ飛ん

で行きながら消え去つた。

「シェア」

人々にサムズアップを向け、なのはの方をゼロが見ると2人は頷き合い、ゼロは空へと飛び去った。

「テアツ」

その後、ゼロはランの姿に戻り、なのはの元へ。

そして先程の場所で待つて いるなのはにいきなりなのはを抱きしめるランだった。

「アーリーだー!?」

- えー
? 「

なのははランから少し離れて自分の唇に指を押しあてる。

「ダメ、かな？／＼／＼」

上田遣いでランを見るなのは、元、ランは胸がキュンシとときめくが

■ ■ ■ ■ ■

(どういう意味だ?)

意味を全く理解していなかつた。

「意味、分かつてないでしょ？」

頬を膨らませながら聞くのはにランはギクツとなってしまつ。

なのははランの肩に手を置いて背伸びし、ランの口に自分の唇を軽く当てる、すぐに離れる。

「……ツ／＼／＼／＼

「……」

啞然とするランと顔を真っ赤にするなのは。

「ファーストキスだからね？／＼／＼／＼

その言葉の意味はランは理解し、一気に顔を真っ赤になった。

なのはは恥ずかしさのあまり翠屋まで走り出し、ランはその場に取り残され、顔を真っ赤にしたままだつた。

*

その頃、レイヤは……。

「イテテ……」

ボロボロの状態でレイヤはある家の前、といつか龍夜とマテリアルズが住んでる家の前で倒れこんでいた。

「大丈夫ですか！？」

そこへ自分を心配するようにセイナが声を慌ててかけた。

(……可愛い//)

セイナの顔を見るにレイヤは顔を赤くし、起き上がる。

「ああ、平氣平氣……イッ！？」

怪我をしている肩を抑えるレイヤ。

「怪我してるとんでもない、すぐに手当しますから待つてください」

セイナにそう言われ、無理やり家の中へと連れて行かれるレイヤだった。

*

次回予告

ウルトラマンゼロ

「さて、中々の強敵だつたダークゼロだが、ただ強さを求めるのは本当の強さとは言わない。また戦う事になつても俺は絶対負けねえ！さあて、次回はコレだあ！！」

月蝕の剣士ジャーグムーンが鳴滝によつて呼び出され、ジャーグムーンは人々を攫う。

その中にはネーナもおり、異変に気付いたカズキとはやてが助けに行き、さらには……。

ゼロ
「次回一『アイツがライバルだー』」

第1弾『死闘！ゼロバスター』（後書き）

このレイヤは、ゼロバスターの零夜に比べると熱血バカ＆子供っぽい個所ありという相違点があります。

予告は列伝風に。

レイヤが連れてきたモンスター・ガードは知り合いで頼んで洗脳兵器を……。

レイヤが作れる訳無いです、バカの子なんですからw

第2弾『ジャーグムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』（前書き）

OP・挿入歌「GO！ リュウケンドー」
ED「ずっとずっとずっと」

タイトル変更しました。

第2弾『ジャーカムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』

その日、月は明るく輝きを放っていた。

八神家では鳴神兄弟やはやてに守護騎士達が夜空を見上げている。

「綺麗な月やな~」

「ええ、主」

上から順にはやてとシグナムが喋る。

「月……か」

カズキは月を見上げながらあることを考えていた。

「カズキ、もしかして彼のことを考えていたのかい？」

ダイキの言葉にカズキは首をゆっくりと頷かせる。

「彼って誰だよ？」

ヴィータの問いにカズキは答える。

「僕と剣を交えた剣士……『ジャーカムーン』だよ」

「ジャーカムーン」とはカズキやダイキがいた世界にいた怪人であり、「ジャマンガ」と呼ばれる怪物達の一昧なのだが、それ以前にジャーカムーンは眞の剣士であった。

彼は剣士としてカズキ……ゴッドリュウケンドーと何度も剣と剣で戦い合い、敵味方の関係を超えた「絆」が出来始めていた。

だが、そこにダークザギが介入し、自分達の世界を滅ぼしたのだ。

皮肉にもジャマンガ達が復活させようとしていた邪悪な「大魔王グレンゴースト」はジャマンガの幹部もうとも滅び去った。

「でも僕はジャークムーンはどうかで生きてる気がするんだ。あの世界にいた仲間達も」

月を見上げるカズキはどこか寂しそうに、懐かしそうな顔をしていた。

「少なくとも私等はいなくなへんよ?」

カズキの手を優しく握るはやて。

「はやて／＼／＼

「お熱いね、2人さん」

ダイキはカズキとはやてを茶化す様に言つたのだった。

*

その頃、ある場所で鳴滝は黒い月の剣士「ジャーグムーン」と話しあっていた。

「分かっているな、破壊者の仲間達を叩き潰すんだ」「リュウケンジャーもいるのだろう？ 腕がなる……」

ジャーグムーンは鳴滝に背を向け歩き始める。

さらばに別のある工場の近くの場所で、男性が一人夜道を歩いていると突然ジャーグムーンが現れる。

「ひいい！…？」

当然ジャーグムーンを見て驚く男性。

「貴様、リュウケンジャーの居場所を知っているか？」
「りゅ、リュウケンジャー…？ なんだよそれ…？」
「知らぬか、ならば貴様に用は無いな」

ジャーグムーンは水晶のようなものを出すとその中に男性は吸い込まれてしまった。

「うわあああ！…？」

とやっこく……。

「貴様、なにをしている？」

偶然にもネーナが通りかかっていた。

なぜこんな夜道を歩いていたのかといつと「ハイハ」と喧嘩した為。

「お前は……確か破壊者の一味だつたな。お前に聞きたいことが
ある。リュウケンジャーはどこだ?」

「教えてどうする?」

「決まつている、倒す……だけだ」

「知らなかつたら?」

ネーナは既に魔導師姿に変わつており、エルシニアクロイツといつ
デバイスも構えている。

「どの道貴様も倒される様に言われているのでな」

ジャーグムーンは「暗黒月蝕剣」といつ黒い剣を取りだしてネーナ
に襲い掛かる。

「三日月の太刀!!」

三日月型の斬撃をネーナに放つたがネーナは飛行して避け、空中か
ら魔力弾「エルシニアダガ」を連続でジャーグムーンに発射する
がジャーグムーンは剣で全てを弾き落とす。

剣をネーナに向けるジャーグムーン。

「大人しくリュウケンジャーのいる場所まで案内しろ」

「仲間を売る気などないな。貴様如き、我一人でも倒せる……」

素早くネーナはジャーグムーンに接近し、ジャーグムーンは構える
が一瞬でネーナはジャーグムーンの背後に回り込みエルシニアクロ
イツをジャーグムーンに振りかざしジャーグムーンにダメージを与

える。

「つぐつーー?」

「エルシー!アダガーナーー!」

再びエルシニアダガーナーをジャーグムーンに放ち、ジャーグムーンはさらにダメージを受ける。

「まだまだーー!」

ネーナはジャーグムーンに接近し、エルシニアクロイツを振り上げるが、その前にネーナの方に振り返ったジャーグムーンにエルシニアクロイツを掴まれる。

「なつー!?」

「生憎だが、私は貴様に倒される覚えは無い。 私を倒せるのは、リュウケンドーだけだ」

「うわあああーー!?!?」

ジャーグムーンの取りだした水晶に吸収されてしまったネーナ。

「ふん」

ジャーグムーンはそのままどこかへ歩き去ってしまった。

だが途中、ジャーグムーンは足を止めてあることを考へる。

(いや、待てよ。 わざわざ探し無くとも魔弾龍が私の気配を感じしてリュウケンドーを私の元まで案内するのではないか?)

ジャークムーンはある建物の屋上に飛びあがり、しばらく待つてみることに。

するとジャーカムーンの予想通りゴッドリュウケンがジャークムーンの気配を感じてカズキをここまで案内してきた。

『まだ近くにいるぞ、カズキ』

「ああ、あいつの気迫を感じる」

カズキはジャークムーンが飛び乗った建物を見上げるとその屋上に自分を見降ろすジャークムーンの姿が。

「久しいな、鳴神！－！」

「ジャークムーン、お前生きてたんだな」

「貴様と決着をつけたまでは死んでも死にきれん」

このジャークムーンの言葉で自分の世界にいたジャークムーン本人だとカズキは確信。

「ああ、相手になつてやる！－－ ゴッドリュウケン！－－」

ゴッドリュウケンをブレスレットから剣を盾に収めた様な「変身待機状態モード」にさせ、ゴッドリュウケンキーという鍵をゴッドリュウケンに差し込む。

「ゴッドリュウケンキー、発動！－－」

『チヒンジ・ゴッドリュウケンダー』

「撃龍変身！－－」

盾から龍の顔がある剣の形をしたゴッドリュウケンを引き抜く

と青い龍が剣先から飛び出し、龍はカズキの身体に降り注ぎ、青と白と金の色を持つ龍の剣士、「魔弾剣士ゴッドリュウケンドー」に変身を完了させる。

「ゴッドリュウケンドー、ライジン…」

「行くぞ、リュウケンドー…」

「おつ…」

ジャーグムーンは建物から飛び降り、ゴッドリュウケンドーと戦い合ひ、誰もいない工場の中へと入り激闘となる。

「はあ…」

ジャーグムーンはゴッドリュウケンドーに斬りかかるが、ゴッドリュウケンドーはゲキリュウケンで受け止め、盾を装備した左腕でジャーグムーンの腹部を殴りつける。

「ぬお！？ 三田円の太刀…！」

「魔弾斬り！…」

三田円の太刀を放つジャーグムーンと、威力が弱くなつたゲキリュウケンの刃を光させて敵を切裂く必殺技「魔弾斬り」を互いに炸裂させ、どちらも相殺される。

その際煙が発生し、ゴッドリュウケンドーは煙を払いのけるとそこにはジャーグムーンはいなかつた。

「どこ行つた！？」

「いじだ！…」

「ゴッヂドリュウケンダーの背中を剣で斬りつけたジャーラムーン。

「ぐわあー!?」「の野郎ー!」

ゲキリュウケンをジャーラムーンに振るうがジャーラムーンは霧のように消え、また背後から斬りかかるがゴッヂドリュウケンダーはゲキリュウケンで防ぐ。

「なにー?」

「同じ手が通用するかよー!」

ジャーラムーンを押し返してゲキリュウケンでジャーラムーンを斬りつけたゴッヂドリュウケンダー。

「ぬわあー?」

「まだまだこれからだー!」

とそこへ、恐らくカズキを追つて来たのだらつはやとシグナムが駆けつけた。

「カズキー!?

「主、今カズキの加勢に……」

シグナムがゴッヂドリュウケンダーに加勢しようとしたがゴッヂドリュウケンダーは「来るなー!」と叫ぶ。

「ツー?」

「なんでやー?」

「こいつがさつき言つてたジャーラムーンなんだ! こいつとの勝負は……俺だけでいいー! そつだろ、ジャーラムーンー!」

「その通り、正々堂々と戦い勝利するー 我等の戦いに手を出す者は許さん！」

だがここでジャークムーンは自分のやつた行為を不思議に思い始めた。

（なぜ私は水晶に人を閉じ込めたのだ？ そもそも私はリュウケンドーと戦えればそれだけいい、他の奴など……）

その様子を影から見ていた鳴滝は、ジャークムーンの異変に気付き舌打ちをする。

「ヤプール」

鳴滝が「ヤプール」と口にすると彼のすぐ近くに時空に亀裂が入りそこから黒ずくめの男性が姿を見せる。

男性はかつて「ウルトラマンエース」「ウルトラマンタロウ」「ウルトラマンメビウス」に何度も倒されでは甦る怨念体「異次元人ヤプール」である。

「奴にマイナスエネルギーを送り、剣士としての誇りを捨てさせり
「分かっている、剣士の誇りなどといつてやらんものを持ちあつて。
ただの魔物が」

ヤプールはジャークムーンに向けて紫色の光弾を放つと、その光弾はジャークムーンの背中に直撃。

「ぐわああーーーー？」
「ジャークムーンーーー？」

一瞬ジャーグムーンは倒れこむが、すぐに起き上がる。

「おい、大丈夫か？」

「リュウケンジー、これを見ろ」

ジャーグムーンが見せたのは水晶に閉じ込められた人々だった。

「なに！？ お前また……ツ！」

「これを翻られたらこの中にいる奴等は死ぬ」

はやてとシグナムは水晶をよく見るとネーナが囚われているのも分かつた。

『くそ、ここから出せ塵芥！…』

「どこが正々堂々やねん！…」

「剣士の風上にもおけん！…」

はやてとシグナムがジャーグムーンに対して怒鳴るが「割るぞ？」
と脅され動けなく。

「ジャーグムーン、どうして……。 正々堂々戦おつって言つたじ
やねえか！」

「満月の太刀！…」

満月の形をした斬撃を「ゴッドリュウケンジー」と喰らわせるジャーグ
ムーン。

「ぐわあああ！…？」

さらにジャーグムーンの剣での攻撃を防がずに何度も攻撃を受ける
「ゴッドリュウケンドー」。

「おわああーーー？」

「反撃すれば水晶を割るだ

そう脅され、ゴッドリュウケンドーはまともに戦えなかつた。
だがその時……。

「ダブルショットーー！」

ジャーグムーンの水晶を持つていて右手以外を正確に捕え、強力な
銃撃をジャーグムーンは受けた。

「つおつーー？」

その際水晶を手から放り投げる様に落としてしまつが、落下する前
に赤い線に銀色の身体の龍の様な戦士「魔弾銃士マグナリュウガ
ンオー」が現れ水晶を掴み取る。

「マグナリュウガンオー、ライジンーー！」

「マグナリュウガンオーーー？」

マグナリュウガンオーの登場に驚く一同。

「久しぶりだなあ、カズキ！」

「まさか、オツサン！」

「オツサン言うなー！」

「どうやらカズキの仲間らしい。

「カズキ、あいつはもうお前の知ってるジャーカムーンじゃない。

魔物だ……」

「だけど……」

『その通りだカズキ、奴はもう殆ど魔物の心に支配されている。それなら支配される前に、倒すのがジャーカムーンにとつてもいい筈だ。完全な魔物になることをあいつが望むと想つか?』

ゲキリュウケンの女の言葉にゴッヂュウケンダーは何も返せなかつた。

「分かった

そこへ魔導師服になつたはやてとシグナムが駆けつける。

「ジャークムーン、行くぜ……」

水晶を安全な場所に置くとゴッヂュウケンダー、マグナリュウガノー、シグナム、はやては並び立つ。

その時だ、計画が失敗した為鳴滝は灰色のオーロラを出現させ、虫のような鋼の身体を持つ魔物「レプトリックス」を出現させ、ゴッヂュウケンダー達に襲いかからせる。

「おわあー!?

ゴッヂュウケンダー達はレプトリックスの攻撃を避け、マグナリュウガノーは「俺に任せろ」と言ふレプトリックスに向かい走つて行く。

銃型の龍の顔がある「ゴウリュウガン」と銃型のもつ一つの武器「マダンマグナム」を構えてレプトリリックスに銃弾を撃ちこむ。

「ダブルショットー！」

レプトリリックスはそれを鬱陶しく思い、長い脚を使ってマグナリュウガンオーに攻撃して来るがマグナリュウガンオーはジャンプして避け、レプトリリックスの背中を踏み台に背後に回る。

「マグナゴウリュウガン！！」

『マグナパワー』

ゴウリュウガンの先にマダンマグナムを合体させ、「マグナゴウリュウガン」にし、一つのキーをマグナゴウリュウガンに差し込む。

「ファイナルキー、発動！！」

『ファイナルクラッシュ』

「マグナドラゴンキヤノン……発射！！」

マグナゴウリュウガンの銃口から炎が飛び出し、その炎は龍の形となつてレプトリリックスを飲み込み、レプトリリックスは爆発して焼き払われた。

『ターゲット、完全消滅』

「ジ・エンド」

ゴッドリュウケンドーはジャークムーンの剣裁きを避け、右からシグナムがrevアンティンをジャークムーンに向けて振り下ろすがゴッドリュウケンドーの首根っこを掴んでゴッドリュウケンドー盾に

する。

「うわあ！？」「

盾にされたゴッドリュウケンドーは勢いの止まらないシグナムに斬りつけられる。

「すまん、カズキ！」

「2人とも離れて！… ミストルティン！…」

最大7本の光の槍をジャーグムーンに放つはやてだが、ジャーグムーンは満月の太刀や三日月の太刀で全て弾く。

「あいつ、あんなに魔力使つて大丈夫なのかよ！？」

「弱い弱い、この程度か？」

ゴッドリュウケンドーの元にシグナムとはやてが駆け寄る。

「確かに、鳴神が認めるだけはあるか……」

「こうなつたら、2人とも、魔力を俺のファイナルキーに注いでくれ！」

「えつ？」

ゴッドリュウケンドーに突然そんなこと言われて、戸惑ははやてとシグナム。

「力を1つにするんだよ、頼む！」

「分かつた、シグナムもお願いな？」

「はい」

「ゴッドリュウケンドーはゲキリュウケンの持つ所を盾に収めるようにめ込み、1つのキーを取り出し、キーにはやてとシグナムは手をかざして魔力を訳与える。

「何をする気か知らんが……」

ジャーグームーンは今の内に攻撃を仕掛けようとしたがマグナリュウガンナーの銃撃で阻まれる。

「貴様」

「よし、充填完了！ 魔力ファイナルキー、発動！」

ゲキリュウケンにキーを差し込ませる。

『ファイナルクラッシュ』

「剣士！！ 魔弾龍！！ 夜天の主！！ 烈火の将！！ 4つの力が今一つとなる、四位一体！！ 龍王！！ 魔弾斬り！！！」

ゴッドリュウケンを振りおろすと剣先の刃から通常は1体だが、はやてとシグナムの魔力を訳与えられたので青い龍が3体飛びだし、通常の3倍の威力を誇る「四位一体・龍王魔弾斬り」をジャーグームーンに放ち、ジャーグームーンは剣で防ぐが、耐えきれず吹き飛ばされ爆発を起こした。

「ぐわああああ！！！！？」

「ジャーグームーン、安らかに眠れ……」

ゴッドリュウケンドー、マグナリュウガンナーは変身を解き、はやてとシグナムも元の格好に戻る。

マグナリュウガンオーに変身していたのは15歳くらいの少年であり、サングラスをかけていた。

ジャーグムーンが消えたことで水晶から人々が放りだされる様に解放される。

「おわあー!?

ネーナも同じく放りだされる様に飛びだしたが偶然にもマグナリュウガンオーに変身していた「不動銃」ふどうじゅうにお姫様抱っこする形で受け止めた。

「おつと」

「なつ……／＼／離せ塵芥!!／＼／＼」

顔を真っ赤にしたネーナは銃一の顔面に強烈なパンチを叩きこんだ。

「ぐぼおー!?

*

ヤプールの次元の狭間では、ヤプールが寸前の所でジャーグムーンを救つており、次元の狭間にジャーグムーンは生きていた。

実はあの時、ジャーグムーンが「死んだように」見せかけていたのだ。

爆発はヤプールが作り出した幻影である。

「助かつたぞ、ヤプール」

「礼には及ばん、だが次は……」

「分かっている、次こそはリュウケンドーを倒す……！」

*

そんなことは知らないカズキ達はそれぞれ家に戻り、銃一も行く所が無いので八神家に住むことになった。

「そういえばオッサン、どうやつてこの世界に？」

ダイキが銃一に尋ねてみると……。

「オッサン言うなダイキ、アンタの方が年上だろ。この世界に来ていてな、あちこち旅していたんだ。偶然お前達を見つけたという所だ」

俺は気付くと
それでさつき

一方、カズキはソファに座つて少し沈んだ様子。

「カズキ……」

はやてはカズキを心配そうに見ており、カズキもそれに気付きはやって自分の膝に乗せる。

「ひやつ／＼／＼／＼

「大丈夫、僕は平氣だから」

笑顔を自分に向けるカズキに、ドキッとしてしまったはやてだった。

(有難う、はやて)

*

ウルトラマンゼロ

「月の剣士、ジャーグムーン。心の殆どを魔物の心に支配されて
いる状態になってしまったが、その腕は確かなものだ。果たして
ジャーグムーンとカズキが再会する時、どうなるのか……？」

次は原作の設定を変え、マテリアル事件から数ヶ月後になのはの『
あの話』をやります。

ゼロ

「さあて、次回は『レだア！！ 魔法の訓練を無茶してやるなのは
とフヨイト。 ある無人世界でロストロギアの回収に向かうが……、
2人の前に金髪の女性が現れる。 次回！！『別世界の縛の巨
人』！！」

第2弾　『ジャーグムーンを打ち破れ！四位一体攻撃！』（後書き）

次回もタイトル変わるかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545x/>

リリカルなのはHEROS外伝

2011年10月23日20時25分発行